

版画家永瀬義郎の従軍軌跡

——戦前絵葉書の美術史拾遺——

彭 国 躍

一．はじめに

日中・太平洋戦争（一九三七～四五年）の時、大量の画家たちが中国大陸や東南アジアに従軍していた。従軍画家たちは、その従軍経緯や身分の違いによって大きく三つのタイプに分けることができる。武藤夜舟、太田天橋、岡本太郎などのように出征将兵として戦場に赴いた人たち、小早川篤四郎、栗原信、鳥海青児などのように派遣報道班員、新聞社特派員として戦地を駆けめぐった人たち、そして藤島武二、小林万吾、南薫造などのように将官待遇を受け比較的自由に行動できる委嘱従軍画家たちである。委嘱従軍画家の中には、さらに藤田嗣治、小磯良平や宮本三郎などのように戦争記録画制作のために戦場で取材活動を行った画家たちもいれば、永瀬義郎、恩地孝四郎、荻須高德などのように従軍はしたものの、風景画しか描かなかった画家たちもいた。

本稿は、日本版画協会派遣の従軍画家として永瀬義郎を取り上げ、現存の関連資料と筆者が発見・収集した

絵葉書の図版に基づいてその従軍軌跡を辿ってみることにする。

二・永瀬義郎の従軍軌跡に関する文献記述

永瀬義郎（一八九一～一九七八）は、昭和時代に活躍した日本を代表する版画家で、日本版画協会（一九三一年発足）の創設メンバーの一人である。永瀬は多くの従軍画家と同じように、戦後その従軍体験について多く語ろうとはしなかったようである。一九七四年に刊行された『日本近代版画六〇年の歩み 永瀬義郎自選版画集』と一九七五年に刊行された画集『日本版画史を生きる永瀬義郎のすべて展』は彼の版画作品の集大成とも言える。しかし、この二冊の画集には従軍関連の作品も見られず、その年譜に従軍事実に関する記載も一切なかった。永瀬は一九七三年（八三歳）頃に人生回顧のインタビュウを受けていたが、その口述内容が矢口圭振の筆記により同年から中道学会機関誌『メソドス』に連載された。永瀬が亡くなる前年の一九七七年にそれがまとめられ『放浪貴族』という書名で刊行された。その本の「第四部 シャトー・ダムール」には「中国大陸に行く」という一節があり、その中で永瀬は従軍体験について次のように回顧している。

「たしか昭和十三年（一九三八）の夏ではなかったかと思うのだが、僕は中国へ行った。まだノモンハン事件は起きていない頃だった。北京から北支蒙疆の一带を回ってきたんだ。もちろん、兵隊として行ったわけじゃない。一種の宣撫活動を兼ねての前線慰問というふうなもので、版画協会からの派遣という形なんだ。僕も、一度くらい中国の雄大な大陸を見たかったし、旅をする機会はないものかと思っていたわけだ。

．．．．．
そもそも慰問の話は僕の発案だった。こういうご時世だから、ここはひとつ版画協会としても独自の画家を派遣しようじゃないか、ということで発起人が実行委員もやることになった。派遣する画家についても、ついに言い出しつpegが是非行くべきだということで、それもそうだというわけで引き受けたんだ。全部で三人が決まった。あとの二人は恩地孝四郎と前川千帆だが、前川は断つたらしい。どういう理由かはわからんけれど、すぐあとでハルピンに行ったがね。恩地は僕よりも近い上海か中国東部のあたりに行ったと思う。

．．．．．

それから陸軍に素描や淡彩画を描くようにと頼まれた。僕は戦争の絵は描かない、描きたくないと言うと、いや描かなくてもよろしい、先生には中国の美しい風景を描いてほしいと言うので、田園風景なら描きましようと返事をした。これは絵葉書を作って日本の兵隊に慰問品として配るらしいんだ。兵隊は戦争の絵など見たくもないだろうしね。そしてそれを日本にいる両親に、自分の安否を知らせるのに使ったようだ。全部で十数枚描いたように思う。

戦後、皇居の堀端に並んだ露店のひとつで、僕の描いた絵葉書を見つけて買ったように思うんだが、あれはどこへ行っちゃったのかなあ。

それから青島にも行ったが、本当に水の美しい町だったね。東洋のヴェネチアといわれる理由がよくわかった。」(永瀬一九七七・二〇九〜二一五頁)

永瀬の回顧内容に基づき、彼の従軍に関する情報を整理すると、次のように列挙できる。

- (1) 従軍の時期（一九三八「昭和一三」年の夏）
- (2) 版画協会の従軍画家派遣（永瀬本人の発案）
- (3) 派遣予定と実施状況（三名予定、永瀬義郎、恩地孝四郎が実行、前川千帆が拒否）
- (4) 従軍の公的主旨（宣撫活動、前線慰問）
- (5) 従軍の私的主旨（中国旅行）
- (6) 経路（北京出発、北支蒙疆巡り、青島）
- (7) 陸軍からの創作依頼（素描や淡彩画）
- (8) 戦争画拒否と風景画提供（一〇数枚）
- (9) 絵の用途（兵隊慰問用絵葉書の制作）
- (10) 絵葉書の図版（戦後露店で購入、のちに所在不明）

まず従軍の時期について考えてみる。『放浪貴族』の中で永瀬本人は一九三八年の夏と述べている。同書の付表「永瀬義郎年譜」でも永瀬の回顧内容に基づき「一九三八年（昭和一三年）四七歳…前線慰問のため、中国を訪問。天津、北京、蒙疆などで、デッサンや人形の作り方を指導する」と記されている。しかし、同じ版画協会派遣の従軍画家恩地孝四郎の「年譜」（三木一九九四）によれば「一九三九（昭和一四）年 四八歳四月…日本版画協会から選ばれ陸軍省囑託として中国大陸（中支）へ行く。一二日宇品出発、上海、南京、九江、廬山、星子、漢口、武昌、漢陽、蘇州、杭州を巡り、五月二二日門司着」となっている。恩地は帰国後も従軍にかかわる写真、版画、随筆を残しているので、その時期について疑う余地はない。そして、飯野（二〇〇

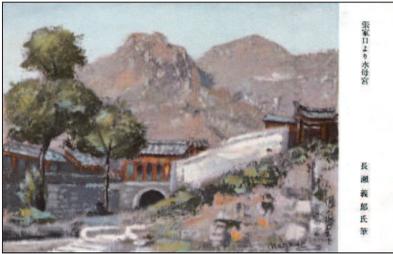
五)で、戦時中画家の従軍情報として「一九三九年四月・恩地孝四郎・前川千帆・永瀬義郎、前線慰問のため陸軍嘱託として約二か月間、中支に赴く。永瀬は、六月帰国」と記されている。飯野の情報源は不明だが、永瀬自身の回顧で言う一九三八年の従軍とは一年間のずれが生じている。この問題について次節で発見された絵葉書を使ってさらに検証する。

回顧では従軍の私的主旨として「一度くらい中国の雄大な大陸を見たかったし」と述べているが、『日本版画史を生きた永瀬義郎のすべて展』には「上海所見（一九二九）」という作品が掲載されている。彼は従軍の時より一〇年ほど前に上海を訪れたことがある可能性が高い。それが事実だとすれば、一九七三年（八三歳）の回顧時に彼はその事実を忘却したのか、または実際「北方中国の雄大な大陸を見たかった」というつもりで言ったかのどちらかになるう。

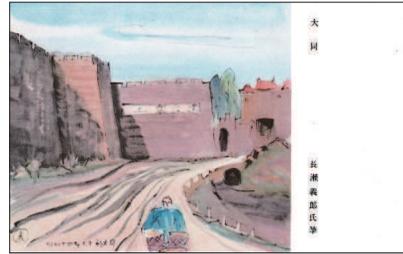
『放浪貴族』の中で慰問用絵葉書を制作するために中国風景画を一〇数枚提供したと述べているが、その具体的な画題や風景内容については触れられていない。

三．軍事郵便絵葉書による図版検証

筆者所収の戦前軍事郵便絵葉書の中で永瀬の従軍に関連する図版は五枚（水彩画一枚と淡彩画四枚）確認されている。図版は①～⑤の通りであるが、絵葉書の裏面は五枚とも同じフォーマットで、図⑥のように上段には「郵便はがき 軍事郵便」、中段には「陸軍恤兵部発行」、下段には「大日本印刷株式会社印刷」と朱文字で



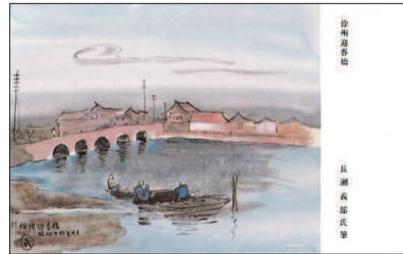
① 張家口より水母宮



② 大同



③ 水郷濟南



④ 徐州迎春橋



⑤ 青島小港



⑥ 絵葉書の裏面

印刷されている。

まず、絵葉書の図版
発見により、一部では
あるが、これまで不明
だった永瀬の具体的な
従軍地域の名前が浮上
した。それぞれ河北省
北部の都市張家口近く
の寺院水母宮、山西省
北部の都市大同、山東
省中西部の都市濟南の
水郷一角、江蘇省北部
の徐州市にある迎春橋、
山東省東部海岸の都市
青島の港風景となつて
いる。

次に、従軍の時期と

経路について検証してみる。落款に年月が明記された四枚の図版(②)～(⑤)はいずれも「昭和十四年六月」と記し、『放浪貴族』における従軍回顧の一九三八(昭和一三)年より一年遅れ、恩地孝四郎の年譜や飯野(二〇〇五)の記述と一致している。ところが、永瀬は「まだノモンハン事件は起きていない頃」と具体的に回顧している。ノモンハン事件は一九三九年に起こったので、永瀬はそれを根拠に一九三八年と思った可能性もある。この点について合理的に解釈する必要がある。ノモンハン事件とは一九三九年五～九月に中国東北部(当時満州国)とモンゴル人民共和国の国境地帯で日本軍とソビエト軍との間で起こった軍事衝突のことである。仮に永瀬が北京↓蒙疆↓山西↓山東の順で移動したとすれば、蒙疆近くに入ったのは四月頃、つまり事件の前ということになる。そうすると「ノモンハン事件は起きていないころ」という永瀬の記憶とも矛盾はしない。ただし、戦闘が始まる一か月前に蒙疆地域がどのような状態で、永瀬がどこまで行き、そこに画家が足を踏み入れることははたして可能なかという疑問は残る。永瀬の回顧の末尾に「青島にも行った」と言ったことから青島は最初の訪問目的地というより北京や蒙疆の近くをめぐるうちに立ち寄ったというニュアンスが読み取れる。具体的な記録がなければ推測の域を出ないが、永瀬は、一九三九年四月頃天津、北京から張家口、蒙疆地域に入り、のちに山西省の大同にまわり、五月つまりノモンハン事件が起こった頃には山東省の済南、江蘇省の徐州へと南下し、そして山東省東部海岸の青島に立ち寄ったのち帰途につき、六月には日本にもどり、一か月以内に旅行中のスケッチに基づいて水彩や淡彩画を描いて提出するというスケジュールで動いていた可能性はある。発見された五枚の図版の地理的位置は図⑦のように示すことができる。

発見された図版の内容は永瀬の回顧通り中国各地方の田園風景である。多くの従軍画家が描いた風景には兵



⑦ 永瀬の従軍地点

士の姿や日章旗などが点景として描かれ、時代背景ともプロパガンダとも解釈される要素が含まれることがあるが、発見された図版を見る限り、永瀬の従軍風景画にはこのような点景が見られない。それが「戦争の絵は描かない、描きたくない」という彼なりの意志表示だったのかもしれない。

四 結び

従軍中の永瀬は、風景画しか描いていないとは言っても、決して美しい風景ばかり見ていたわけではない。従軍画家を含まさまさまな従軍慰問の性格について、各地で目にした従軍慰安婦の境遇に触れながら、彼は次のように述べた。

「大陸に送り込まれた慰問団は、いわゆる占

領・宣撫の文化工作部隊だ。揚句は戦地の兵隊を慰める特別な女性をやったりしてね。慰安婦などという呼び方をしていた。お国のためとは言いながら、彼女たちが一番惨めな運命をたどったに違いないんだ。戦争が終わってからも、無事日本に帰ってこれたかどうか。可哀相なもんさ。戦争というやつはどれをとっても、ろくなことはない」（永瀬一九七七・二二〇頁）

そのことばには不幸な戦争時代を生きた従軍画家永瀬義郎の深い思いが込められていた。

最後に、日中・太平洋戦争における従軍画家の歴史には、その人数、経路、地域と絵画図版を含む実態の解明が重要な課題として残されている。筆者は一人ひとりの従軍画家の足跡を辿り、その作品図版を発見し確認することにより、従軍画家の歴史に包まれる謎が少しずつ解けてくるのではないかと期待している。

参考文献

- 飯野正仁 二〇〇五 「戦争に征った画家たち」『あいだ』（二一六―二九号）「あいだ」の会
- 小田急百貨店編 一九七五 『日本版画史を生きた永瀬義郎のすべて展』大塚巧藝社
- 永瀬義郎 一九七四 『日本近代版画六〇年の歩み 永瀬義郎自選版画集』永瀬義郎版画出版委員会
- 永瀬義郎 一九七七 『放浪貴族』国際PHP研究所
- 藤崎綾 二〇〇五 「南薫造『従軍日記』」『広島県立美術館研究紀要』
- 彭国躍 二〇一三 「南薫造『従軍日記』の図版検証―戦前絵葉書美術史拾遺」『神奈川大学評論』（七四）
- 彭国躍 二〇一三 「従軍画家瀬野覚蔵とその戦地記録画―戦前絵葉書による美術史拾遺」『人文学研究所報』（五〇）神奈川大学人文学研究所
- 彭国躍 二〇一四 「従軍画家たちが描いた戦時中の上海―軍事郵便絵葉書による図版検証」シンポジウム（二〇一四年二月二十五日）『東アジアの租

界・居留地とメディア』神奈川大学非文字資料研究センター主催

三木哲夫編 一九九四「恩地孝四郎」年譜『恩地孝四郎 色と形の詩人』(横浜美術館、宮城県美術館、和歌山県立近代美術館編) 読売新聞社